

「信仰年」と私たち (IV)

主任司祭 吉池 好高

教会の典礼暦は「信仰年」のうちに迎えた復活節の喜びの中にあります。過ぎ越しの聖なる三日間と復活祭、そして、その喜びを分かち合う復活節こそ、私たちの信仰の中心です。「信仰年」が目指していることは、私たちの信仰の歩みを振り返ることだと言われる時、私たちは自分の信者として生活を振り返るということだと受け止めてしまいがちかも知れません。私たちがそう思ってしまうのは、私たちが、私たちのカトリック信者としての信仰を、あまりにも、「私の信仰」というふうに意識しすぎているからかも知れません。私たちの信仰は、確かに、それぞれの私たちの「私の信仰」ですが、その「私の信仰」によって、私たちは、それぞれの私たちが信じているお方と結ばれているのです。そして、それぞれの私たちが信じている「私の信仰」がカトリック信者としての「私の信仰」であるなら、それぞれの私たちが信じている「私の信仰」によって、私たちは、十字架の死を越えて復活された「私たちの救い主イエス・キリスト」と結ばれているはずで、私たちが信仰の歩みを振り返るといふ「信仰年」の勧めはそのことを振り返るといふ勧めです。このように考えるなら、教会の典礼暦のこの季節は、この一年の「信仰年」のクライマックスをなす喜びの季節です。典礼暦の復活節のこの季節に主日のミサの中で朗読される福音は、復活の主の弟子たちに対する顕現の出来事を語ります。

ルカ福音書では、エマオの宿で、旅の途中道連れになったその人が、パンを裂いて分け与えてくれた時、二人の弟子の目が開かれて、自分たちと食卓についたその人がイエスだと分かったことが語られます。ヨハネ福音書では、園丁だとばかり思っていたその人に、「マリア」と呼びかけられたとき、マグダラのマリアは「ラッポニ」と叫んでその人の足を搔き抱いたと語られます。この目で見、この手で確かめなければ、決して信じないと言い張っていたトマスは、その人の顕現に接した時、「私の主よ、私の神よ」と叫んだと語られています。復活節のこの季節、それぞれの私たちが信じている「私の信仰」が、このような「私の信仰」となりますように。